
学園黙示録に奴を放り込んでみた。

飛妖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録に奴を放り込んでみた。

【Nコード】

N7589N

【作者名】

飛妖

【あらすじ】

学園黙示録にあのチートを放り込んでみた！

プロローグ

とある街、とある場所にて

「い、いや・・・こないで・・・」

一人の少女が死の危機に瀕していた。

「あゝーあゝー」

少女を襲うは死んでなお動き続けるモノ。

少女は壁際へと追い詰められ、既に逃げる場所は無くなった。

（誰か・・・助けて！）

もしここに人がいれば誰もが思うだろう。

この少女は助からない、と。

しかし、奇跡は起こった。

もう、誰でもいい、何でもいい、と助けてを願う少女の願いが届いたのか。

少女の足元が発光する。

その光は一瞬で辺りを包み込んだ。

少女は思わず目をつむる。

そして光が収まり目を開けた時――

「え？」

――少女の目の前に鉛色の肌を持つ巨人が立っていた――

第一話　バーサーカー（前書き）

注）この小説はかなりのチートがあります。

学園黙示録にチートはいらねえって人はモドルを！

あと最後にあとがきをご覧ください。

[■ ■ ■ ■ ■ ■]
[| | | | | |]
[! ! ! ! ! !]

いきなり目の前に現れ、咆哮をしながら『奴ら』を圧倒的な力で殺していく巨人。

自分の助かりたいという願いが叶ったのだろうか？

しかし、その内少女の意識が遠くなり、完全に意識を手放した。

• • • • •

バーサーカーは圧倒的な力で次々と大量群がって来る死人を全て殺した。

そして、少女を見ると召喚のせいかな、それとも気が抜けたのか、気絶していた。

バーサーカーは少女が目を覚ますまで待つ事にし、死人が来ないように見張りをする事にした。

・ ・ ・ ・ ・

「うう・・・ん・・・」

しばらくして、少女が目覚めた。

少女は目をこすり、キョロキョロと辺りを見る、そして目がバーサーカーへと止まった。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

両者、無言で見つめあう。

「……ふえ」

「!」

少女が目には涙をため泣きそうになる。

バーサーカーは何かしようとするが、いかんせん、自分は喋れない。

バーサーカーで召喚された自分に怒りを覚えた。

少女はそんなバーサーカーの心情を察したのか、泣きはしなかった。

そして、ジッとバーサーカーを見つめる。

「助けてくれたの？」

そして、そうバーサーカーに聞いた。

「……」

バーサーカーは無言で頷く。

「そっかあ」

ありがとうございます！」

少女は元気よくバーサーカーへお礼を言う。

「私は伊里夜^{イリヤ}巨人さんのお名前は？」

伊里夜はバーサーカーの名前を尋ねる。

が、バーサーカーは喋れない！

再びバーサーカーがどうするか考えようとした時

「あれ？」

伊里夜が声を上げる。

バーサーカーはどうしたのかと伊里夜を見る。

「何だろ？ 頭に何か浮かんできたよ？
えーと・・・？ バー・・・サーカー？」

すると伊里夜がクラス名言った。

「これがお名前？
バーサーカーって言うの？」

バーサーカーは頷く。

「じゃあ、こっちの真名って言うのは？
もしかしてこっちもあなたの名前？」

バーサーカーは再び頷く。

伊里夜は名前が2つあるのでどっちで呼ぶが悩んでいる。

「じゃあ、バーサーカーって呼ぶね！」

呼び方はこっちに決まったようだ。

「これからどうするの？ バーサーカー」

そう聞いた伊里夜のお腹がグウ、と鳴った。

「あ・・・」

お腹空いちやった・・・」

伊里夜は死人から逃げ回って何も食べていなかった。

「どこかに食べに行こう、バーサーカー」

伊里夜はそう言うと言おうとするがバーサーカーにバーサーカーの肩へと乗せられた。

「わぁー、高い高い！」

ありがとう、バーサーカー！」

伊里夜は嬉しそうに、バーサーカーの上でハシャいでいた。

第一話ーバーサーカーー（後書き）

いきなりですがこの少女にあう、名字を募集！（え

名前はもうこれで決めたから・・・

名字を募集！（あ

ちなみに伊里夜の頭に浮かんだのはバーサーカーのステータス画面

登場人物

【伊里夜】

今作の主人公？ポジション

作者のネーミングセンスのなさによりこのような名前になってしまった。

名字考え中

年齢11歳

外見はもう、F a t eのイリヤとほぼ同じ

父親が日本人、母親が外国人のハーフ

母親似

つい先日、床主市に引っ越してきた。

しかし、すぐに世界がゾンビだらけになってしまったため、床主市の事（地形など）を全く知らない。

両親は自分を逃がすために奴らの餌食になり死亡。

あちこち逃げ回っていたが追い詰められ、死にかけた時にバーサーカーを召喚、一気に生き残る確率が増えた。

本来この世界にないであろう、魔術回路を持っている。

持っているだけでその存在をしらないし魔術を使えるわけでもない。

【バーサーカー】

真名ヘラクレス

ギリシヤの大英雄

何故か第五次聖杯戦争の記憶を持っている。

筋力…A+ 魔力…A

耐久…A 幸運…B

敏捷…A 宝具…A

【スキル】

【狂化…B】

パラメーターをランクアップさせるが、理性の大半を奪われる。

しかし、伊里夜はこのようなモノをしらないため恐らく狂化は出来ない。

【技能】

【戦闘続行…A】

生還能力。

瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

だがはつきりいってこの世界にバーサーカーに致命傷を与える武器は殆どない、もしかしたら全くないかもしれない。

【心眼（偽）…B】

直感・第六感による危険回避。

【勇猛…A+】

威圧・混乱・幻惑といった精神干渉を無効化する能力。

【神性…A】

主神ゼウスの息子であり、死後神に迎えられたヘラクレスの神霊適性は最高クラスと言えるだろう。

【宝具】

【十二の試練】十二の試練

ランク…B

種別…対人宝具

レンジ…一

最大補足…1人

原典…ヘラクレスの十二の偉業

生前の偉業で得た祝福であり呪い。

Bランク以下の攻撃を完全に無効化し、蘇生魔術を重ね掛けすることで代替生命のストック11を有する（もともと持つ命と合わせて12回殺さないと死まない）。

さらに既知のダメージに対して耐性を持たせるため、一度殺した攻撃で再び殺されることはなくなる。

ただし、オーバーキル級のダメージ（ランクA＋程度）は一撃で複数の命を消し去ることも可能（例えば「勝利すべき黄金の剣」は一撃で7回の命を殺した）。

「命」と表現されるが蘇生魔術であるので、マスターの魔力供給によってストックは回復可能。正確には、倒すためには「回復する機会を与えずに12回殺す」必要があり、戦闘と撤退を繰り返して徐々にストックを消耗させる、という戦法は基本的に通じない

【射殺す百頭】 ナインライブズ

バーサーカーになっているため本来の射殺す百頭は使えない。

かなりの速さで百回斬りつける。

学園黙示録でのバーサーカーはかなりチート

てかバイハザのネメシスでさえバーサーカーに一撃でやられると思う。

第二話ーバーサーCARー（前書き）

いきなりだが皆さんに質問

1. バーサーカーは喋った方がいいかな？

2. バーサーカーは常時見られてもいいやゝ、的に姿を表したまま
でいいかな？」

質問は以上！

てか、今回こんな早く原作キャラと対面するとは思わなかったよ（え

あと時間帯が変かもだが突っ込みはなしで！

第二話ーバーサーCARー

「あ！ バーサーカー！ あそこ、あそこにコンビニがあるよ！」

伊里夜が指をさしながらバーサーカーに言う。

バーサーカーはすぐさま歩みをコンビニへと向ける。

ちなみに《奴ら》はと言うとバーサーカーの歩く音などに反応しバーサーカーに襲いかかってきたがバーサーカーの皮膚を噛んだところで傷一つつかない上に踏み潰されていった。

バーサーカーは伊里夜を肩から下ろし、自分はこの状態ではコンビニに入る事が出来ないため霊体化する。

「え！？ あれ？ バーサーカー！？」

バーサーカーの姿がいきなり消えたことに驚愕し、バーサーカーを呼ぶ。

するとバーサーカーはすぐに姿を表した。

「わ、もう！ いきなり消えちゃったからびっくりしちゃったじゃない！」

プンプン！と伊里夜が怒る。

「でも、消えたり出たり自由に出来るの？」

「・・・・・・・・」

伊里夜の問いにバーサーカーは頷く。

「すごい！　じゃ、消えてみて！」

伊里夜の言葉にバーサーカーは姿を消す。

「わぁ、あ。消えてる時ってバーサーカーに触れないんだ。幽霊みたいになってるって事なのかな？」

ふんふん、と頷きながら自分で色々と納得する。

「これなら、コンビニの中に入れるね！
じゃあついて来て！」

そう言うコンビニの中に入る。

「うーん・・・・・・・・
いない・・・・・・・・かな？」

キョロキョロと店内を見回し《奴ら》がいない事を確認するとおにぎりやパンが置かれている所にいき自分の好きなモノを選び手に取る。

「お金、ないけど、店員さんも誰もいないし持って言っていいいよね。」

そう言いながら、おにぎりを服のポケットに入れてコンビニを出た。

・
・
・
・
・
・
・

「はむはむ」

伊里夜はバーサーカーの肩の上でおにぎりを頬張る。

今のバーサーカーは殆どバーサーCAR状態である。

揺れないし、乗り心地最高！（※口から砲弾は出ません。）

「んい？ あ、学校だ」

ぶっちゃけどどこに行くかなど全く決めていない二人は適当に歩き続けていると、大きな学園にたどり着いた。

その学園の名は藤美学園。

しかしもう既に《奴ら》により中にいた生徒達はほぼ《奴ら》になっているようだ。

「……バーサーカー

もし、生きてる人がいるかも知れないからちょっと見に行ってみよう？」

バーサーカーはその言葉に頷き、門へと歩く。

すると

———ガキイイイイン！！———

大きな音が鳴り響いた。

「ふえ？」

玄関の方から数人の生徒達が走ってくる。

「なっ!？」

そして、自分達を見た瞬間足を止めた。

「え、えと、皆さん、今の内に逃げてくださーい！！！！！」

バーサーカーの肩から片腕の中に移動していた伊里夜が未だ固まっている生徒達へ叫ぶ。

「くっ、みんな、しっかりしろ！ 今の内に行くぞ！」

一人の生徒が皆に言い。覚醒した生徒達とバスの方へと駆けていく。

皆がバスに乗り込み程なくしてバスは発進し校門から外へと出て行った。

「な、何とかなったのかな？」

うーん、バーサーカーは何もないときは消えて貰った方がいいかなあ？」

バーサーカーの腕の中で伊里夜が考える。

そしてバーサーカーは既に《奴ら》を殺し尽くしていた。

バーサーカーにとって竜牙兵、下手をすれば竜牙兵よりも弱いかもしれない死人がいくら束になろうと無意味なのである。

そして、先程出て行った生徒達が生き残りだったのだろうと、伊里夜達は学校から出てまたどこかへと歩き出した。

しかし、学園内にまた生き残りはいた。

「せ、先生、行ったようです。」

「そうですか、一体あれは何なのでしょうか・・・」

生き残りは眼鏡を書けたスーツの男性と数人の生徒達であった。

「皆さん、私達も早くここから脱出しましょう。」

そして、この教師と生徒達はもう一台存在していたマイクロバスに乗り学園から脱出した。

第三話一 お昼寝一 (前書き)

何かとても眠くて今書いた内容が全く思い出せない・・・

あれ？

第三話―お昼寝―

学園から脱出した後のバス内

「……アレ、何だったんだろう？」

バス内の一人、コータが呟く。

「知らないわよ！ 何よあの化け物は！？」

コータの言葉に 高城がこたえる。

「アレも《奴ら》なのか？」

「それならば、一緒にいた女の子は何だ？」

孝の言葉に冴子が応える。

「あの子、私達を助けてくれたよね？」

《奴ら》だったら襲いかかってくるんじゃない？」

麗が言う。

「それに、あの巨人さん、《奴ら》みたいに腐ってたりしてなかったし、突然変異だとしてもあそこまで大きくならないんじゃない？学校の二階にとどくくらいの大きさだったわよ？まあ、《奴ら》の突然変異なんか見たことないから何とも言えないけどね。」

バスを運転しながら鞠川が皆に言う。

しかし、やはりみんなバーサーカーは恐いのか何とも言えない顔をしていた。

・ ・ ・ ・ ・

「はあ、コレからどこ行こうかなあ」

伊里夜が呟く。

あれから学園を出て適当に歩いている事、数分。

大きな川を見つけ、その川の離れ小島のような場所で寝そべっていた

バーサーカーは霊体化している。

「んー、でも、何だか眠くなって来ちゃったなあ」
ここはあのゾンビ達も来れないみたいだし

ちょっと寝ちゃおうかなあ

でも、こんな状況で眠くなる私ってどうなんだろう・・・？
バーサーカーがいてくれて安心してるのかな？」

ふわぁー、と欠伸をし、目をこする。

「眠くなると、やろうと思ったりする事が二の次になっちゃうのは何でなんだろう

でも、やろうと思ってる事は今何もないから寝ちゃおう・・・」

なんかもう、伊里夜の目がとろんとして、まばたきが多くなっている。

完全に、眠いけど頑張って起きている状態である。

「はふう、バーサーカー・・・

私、お昼寝する・・・

夜になったら起こして・・・」

そう、バーサーカーに言い、完全に瞼を閉じる。

そして数分後に寝息が聞こえてきた。

・
・
・
・
・
・
・

あたりが暗くなり、夜になった。

「うう・・・ん・・・」

伊里夜はまだ寝ていた。

バーサーカーは夜になった事により姿を現し、伊里夜のそばに座っていた。

伊里夜の寝顔を見て、あの時の事を思い出す。

『バーサーカーは強いね。』

守ると誓い守れなかった、雪のような白き少女。

彼女の事を思い出し、守りきれなかった事を悔やむ。

「んう・・・あれ・・・？」

もう夜になってたんだ・・・」

そうしていると、伊里夜が起きた。

「あ、バーサーカー、おはよう・・・あれ？　夜だからおはようじゃないか・・・こんばんは？」

んん？　と夜に起きた時の挨拶を考えている少女を見てバーサーカーは、この少女は絶対を守ると再び誓った。

第四話一再会一（前書き）

伊里夜の名字決定！

【冬城 伊里夜】

これに決定だ！

水川さんありがとうございます！

他に考えてくださった皆さんもありがとうございます！

第四話一再会一

「うー

じゃ、行こ、バーサーカー」

バーサーカーの肩に乗せてもらって川を渡る。

うーん、バーサーカーってどうしてこんなに大きいんだろ？

ご飯一杯食べてたのかなあ？

川を渡りきり道を歩く。

• 夜だからかな？ 何だか怖いな、昼間は全然平気だったんだけど・

「あゝーあゝっ！」

ブチブチブチ！

でもバーサーカーが物凄く頼もしいなあ。

•
•
•

・ ・ ・ ・

結構歩^{バーサーカーが}いてるけど、ゾンビくらいしかないなあ

お家が一杯あるけど、どこも灯りはついてないし・・・

それにしても何だか昼間よりゾンビが多くなってる気がするよ？

バーサーカーの足首が見えない・・・

でも転けたりはしないなあ

歩く速度も何も変わってないし。

「・・・ん？」クルリ

・・・！！！！！！！！！！

・・・後ろ向かなきゃよかった・・・

何だかバーサーカーの通った後が大惨事になってるけど・・・

し、しゝらない！

「それはそうと、何にもないねゝ バースーカー？」

そろそろ、お腹すいて来ちゃった・・・

またコンビニとか探さないと

お金ないから自動販売機じゃ何も買えないんだよね・・・

「・・・」
ヒュッゴン！

ピーピーピーピーー
ガラガラガラガラガラ！！！！！！

道端にある自動販売機を見ていたらバースーカーが自動販売機を叩いてジュースを出してくれた・・・

わぁゝ、片手で自動販売機を掴み上げてゝ！

バースーカーが目の前に持ってきてくれた自動販売機から飲みたいジュースを取る。

「ありがとう、バーサーカー!」

私がジュースを取り終わるとバーサーカーは自動販売機にもう用はないと後ろに放り投げた。

ズガン!

ピー・・・ピー・・・ピー・・・ピー・・・p・・・

自動販売機、君の事は忘れないよ!

・・・

「んくんく・・・

ぷはぁー! 美味しい・・・

でも下は向かないように・・・」

んー、でもやっぱりゾンビ以外何もないなあー

コンビニ・・・

お腹空いた・・・

うーん、あの時、もっと一杯、おにぎりとか持って行けば良かったかな？

．．．．．ん？

あれ？ あの家灯りついてる．．．

誰かいるのかなあ？

行ってみよ！

「バーサーカー！ あのお家に行ってみて！」

．．．．．

「平野」

「ん？ 何だい？ 小室？」

「何か．．．音が聞こえないか？」

こう、ズシ！ズシ！みたいな。

「お風呂場からじゃないの？」

「いや、麗達の声とかじゃない・・・と思う。」

何か近づいて来てるような・・・？

僕がもっと音に耳を傾けようとした時

「あ、やっぱり人がいたね、バーサーカー」

ベランダの方から女の子の声が聞こえた。

「は・・・？」

ベランダの方を見ると女の子が浮いて・・・いや、女の子は腰掛け
いるだけだ、巨大な人に・・・

・ ・ ・ ・ ・

「うわわわわ!! で、出たあ!？」

太っちょのお兄ちゃんが驚いている。

ううゝ、ひどい・・・

幽霊を見たみたいにな・・・

確かにバーサーカーは幽霊みたいではあるけど

「あれ? お兄ちゃん達、今日学校にいたよね? 偶然だねゝ!」

他にいた、お姉ちゃん達もいるのかな?

「き、君は一体何者なんだ?」

「私? 私は【冬城 伊里夜】だよ!
こっちはバーサーカー!」

「きよ、狂戦士・・・
いや、納得は出来るけど・・・」

今日先師? 何だろ?

「お兄ちゃん達、何でほったヒクヒクしてるの?」

お兄ちゃん達はバーサーカーを見てヒクヒクしてる・・・

怖いのかな？

バーサーカーは優しいのに〜

「ん〜、よし！

よいしょ、よいしょ・・・」

バーサーカーの肩からベランダに降りる。

「バーサーカー、ちよつとの間消えててくれる？」

「・・・」

バーサーカーは頷くとスウ・・・と消えていく。

「なっ！？ き、消え・・・！」

「凄いでしょう〜

バーサーカーは消えたり出たり出来るんだよ！」

何だか二人ともポカンとしてる。

何で？

あ、消えちゃったら驚くよね。

「あ、あれは危険じゃないのか？」

「あれ？ バースカーの事？
バースカーはスッゴく優しいよ？
私の事も助けてくれたし！」

「そ、うなのか」

「ね、ねえ、君は何しにきたの？」

「ここだけ灯りがついてたから来てみたの
それより、何か食べ物はない？

お腹すいちゃったの

お兄ちゃん達、もしよかったら私に分けて」

「あ、ああ、うん、多分何かあるはずだから、いいと思う。」

「本当！？ ありがとう！」

やっと、食べられる♪

【ネタ】ただやってみたかった超短編

これは伊里夜が自動販売機を見て思った事である！

「……………」ジー

自販機「……………」

「……………」

自販機「(p。u。)」

「……………」

あの自動販売機……

バイクに変形したりしないかなあ……？

メダル入れたら、ウィーン！って。

自販機「タカ・トラ・バッタ！」

「えっ!?!」

あれえ？ 今、自動販売機が何かいわなかった？

自販機「タ・ト・バ！ タトバ タ・ト・バ！」

あるえ？

やっぱり言ってるよ？

オーズ？

あの自動販売機、オーズ？

「凄いねえ、バーサーカー」

というだけの話。

第五話ーヘラクレスー（前書き）

ポケモンをやりまくって小説更新を忘れていた・・・

恐るべしポケモン・・・！

第五話ーヘラクレスー

※バーサーカーに助けられて原作だと死んだ首タオル君達は生きていますが僕がキャラを把握していません『いるけど完全に空気』みたいな状況になっています。

もしかすると、その内フェードアウトして原作通りの人数になってしまうかもしれません。

あしからず！（あ

・
・
・
・
・
・
・
・

「ふう、いいおy・・・」

「はむはむ・・・！」

あ、ありのまま 今 起こった話を話すわ！

私が、お風呂から上がりリビングへ行くとお風呂に入る前にはいなかった女の子が、いつのまにかいてご飯を食べていた・・・

な、何を言っているのか分からないと思うけど

私も何が起こったのかわからなかった・・・

もつとも恐ろしいものの片鱗を味わったわ・・・

「れ、麗？ 何でそんな濃い顔になってるんだ・・・？」

「へっ！？ あ、いや、ていうか、何であの子がいるのよ！」

「い、いや、例の巨人に乗ってここまで来て、お腹すいたっていうから・・・」

って事はあの巨人もいるのかしら？

「きゃー！ 可愛い！ あなたいつの間に来てたの？」

「ぶえ！？」

あ、先生がハムハム食べてたのを見て抱きついた・・・

「ちょっと！ 何でアレがいるのよ！？」

「アレって・・・

いや、もうカクカクシカジカだよ」

便利な表現ね。

・
・
・
・
・
・
・

「うゝん☆ やわらかゝい♪」

「あゝうゝ・・・」

うう・・・

凄い、頬擦りされてる・・・

何このお姉ちゃん・・・

・・・それにしても、おっぱい大きいなあゝ

「ちょっと」

「ふえ？」

眼鏡のお姉ちゃんに話しかけられた。

何だろ？ 何か睨まれてる？

「単刀直入に言うけど、あんたと一緒にいた、あの巨人は何なの？」

「バーサーカーの事？」

「狂戦士、ね

まあ、納得だわ」

ふとっちょお兄ちゃんも言ってたけど、きょうせんしって何だろ？

「でも、それが名前とは思えないんだけど」

「ええ〜？ 名前だよ？

もう一つあるけど」

「そのもう一つの名前は？」

「えっとねえ！ ヘラクレスだよ！」

ピシッ！

ってお姉ちゃんから聞こえたような気がする・・・

「ヘラクレス？」

「うん、ヘラクレス！」

「何の？」

「え？ 何のって？」

「オオカブトとかあるでしょう！？」

「ええ！？」

オオカブト？

ヘラクレスオオカブト？

バーサーカーってカブトムシだったの？

「角生えてないから違うよ！」

「お、おい、高城？」

どうしたんだ？」

「ヘラクレス・・・？・・・ギリシャの？ いや、有り得ないで
しょ？・・・でも、ヘラクレスなら巨人でも納得出来るけど・・・
いやいや」ブツブツ

お姉ちゃんが何か凄い、ブツブツ言ってる・・・

「他よっ！ 他に何かないの！？」

「他？ うゝん・・・」

何かあるかなあ？

えゝと・・・

あっ！ そうだ！

バーサーカーの名前とか見えたアレ、もう一回見えないかなあ？

「えゝと・・・」

前は頭の中に浮かんできたから・・・
出ろ出ろー

・・・
あともう少し・・・
あつ！ 何かモヤモヤ出てきた・・・

・・・あ、出た！

「出たよゝ」

「何がよ？」

「えとねー、変なの」

「変なのって何よ・・・」

私もこれが何なのかわからないし・・・

「何かね、バーサーカーの名前とかが書いてる変なのが頭の中に浮かんで来るの。」

「どういう事なのかしら？」

まあ、いいわ、それで、何か分かるの？」

何か名前じゃないのが浮かんでるけど、漢字がわからない・・・

「何か出てるけど、漢字でわからない・・・」

「それ、見えてるんでしょ？
なら紙に移し書きすればいいじゃない。」

「あ、そっか」

紙とペンを渡される。
え〜と・・・

「う〜んと・・・」カキカキ

『射』『殺す』『百』『頭』

「これ！」

「射殺す百頭・・・ナインライブズ・・・？
他は？」

「え〜と・・・
これ！」

「十二の試練・・・..
確定じゃない・・・」

「高城君、さっきから何をしているのだ？」

ふわぁ！？

エプロンだけのお姉ちゃん！

こういうの何て言うんだっけ？
変態？

でも全然変態っぽくないから違うよね。

「いえ、何でもないわ・・・
ええ、何でもない。」

「？　　そうか・・・」

もう、終わりかなあ？
じゃ、残りのご飯たべよ

超番外編一集合一（前書き）

やっちゃったぜ・・・！

こんなんやってる暇があるなら本編かけよ、と。

ちなみにこの番外編は他二作品にも掲載されております。

超番外編一集合一

とある世界、そこは大量の死人、所謂ゾンビにより滅亡の危機に瀕していた！

そんな壮絶な世界は1から5へ5から10へと様々な物語を展開しながら増えていった。

この話はその中の三つの世界の主人公達が作者と言われる理不尽な神の悪戯により出会ってしまった話です。

・
・
・
・
・
・
・

sideー伊里夜ー

シュウウウウン

「ふえ？

何これ？」

変な灰色の何かがいきなり出てきたよ！

「バーサーカー、何かなこれ？

触れるかな？」

バーサーカーに灰色の変なものに近づいて貰って観察する。

「むうん・・・

何だろね？」

よくわかんないから、ちょっと触ってみようとしたら、いきなり変なものが私達に近づいてきて、私達は変なものの中に入っちゃった。

・ ・ ・ ・ ・

side—蓮児—

シュウウウウン

「おおう！ これはっ！？

オーロラ！

鳴滝か？」

辺りを見回す、うん、誰もいやしねえ・・・

「何だろうな・・・？」

入れてか！？

フツ、いいだろう。

入ってや「早く行きなさいよ。」るううう！？」

ちよっ！？ 高城さん？

何でっ！？ 何でそんなナチュラルにドSなんすか！

てか、何故、おぜう様だけいるんだ？

冴子とか、孝とかコータとかは？

まあ、うん、なんやかんやで潜っちゃった☆

・ ・ ・ ・ ・

side—白亜—

シュウウウウン

「？ 何でしょうか？ これは・・・？」

この灰色の・・・オーロラ？みたいなモノは一体・・・

ん？ 何故かどこかで見たとがあるような・・・？

何でしょう？ もしかすると転生前に見たことがあったのかも知れませんね。

きつと、テレビなどで、こんな、いきなり地面から上ってくるオーロラもないでしょうに。

それはそうと・・・

「何かコレ、近づいて来てませんか？
近づいて来てますよね？」

逃げられない感じでしょうか？

後ろからも迫って来てますし。

まったく、ゾンビだけでも非日常なのにさらに変なオーロラですか・

・

そこまで貴重な体験、別にしたくないのですがね。

・

・

・

・

・

・

・

side—伊里夜—

うーん・・・

変なものの中に入っちゃったけど・・・
別に何時もと変わらないよ？

「バーサーカー、どうしょつか？」

取りあえずバーサーカーと一緒に考えてみよう！

バーサーカーと話しながら（と言ってもバーサーカーは喋らないけどね

でも、不思議とバーサーカーの言いたい事はわかるよ。）道を歩き。

私達は十字路へと差し掛かった時

「あれ？」

「え？」

「なん・・・だど？」

・ ・ ・ ・ ・

side—蓮児—

さて、ツンデレラ様に蹴り飛ばされてオーロラ潜っちゃったが、別
に変わらねえ・・・

強いて言うならゾンビ共が見当たらんって事か・・・

さてさて蛇が出るか蛇がでるか・・・

あれ？ どっちも同じじゃん・・・

どっちみち危険ってか？

ま、まあ、デイケイドライバーは取り出せるし、大丈夫・・・だよ
ね？

結構不安ですが何か？

まあ、そんなこんなで歩いていると十字路に差し掛かった。

「なん・・・だど？」

「あれ？」

「え？」

・
・
・
・
・
・

・
side 白亜一

さて、オーロラに飲み込まれたのはいいですが、景色が変わらないのは気のせいですかね？

まあ、何もないならそれでいいんですがね。

もしもの時の為にフル装備ですが。

取りあえず

毒島さん達と合流しましょうか・・・

というか、何故私は皆さんと離れているんでしょう？

何か陰謀を感じます・・・。

などと考えながら歩いていると十字路に差し掛かり・・・

「え？」

「あれ？」

「なん・・・だと？」

・
・
・
・
・

・

「お兄ちゃんとお姉ちゃん、誰？」

「いや、君こそ誰だよ」

はっはっはっ！ 何でバーサーカー！？」

「バーサーカー・・・

どこかで見たことがあるような・・・？

やはり転生前でしょうか？

というか何で私はこんなに冷静なんでしょう？」・

・
・
・
・

side—蓮児—

うおーい！

何でバーサーカー！？ 何でバーサーカー！？

大事な事なので二回言いました。

じゃなくて、え？ 何？ 実はF a t eの世界だったの？

いや、ならあそこにいる何か無駄にカッコいい弱音ハクは何だ？

・・・何だ夢か・・・

side—伊里夜—

お兄ちゃんが何だか面白い顔をしてたから眺めていたら

バーサーカーがいきなりお兄ちゃんに攻撃した。

「バーサーカー！？　どうしたの！？　何で・・・！」

どうして攻撃したのかバーサーカーに聞こうとしたら

「変身！」

そんな言葉が聞こえた。

お兄ちゃんの方を見るとカードを腰の変なものに入れて、姿が変わっていた。

「へ、変身だあ！」

ディ、ディケイドだあ！」

わあゝ、凄い凄い！

仮面ライダーって本当にいたんだあ！

あ、じゃあバーサーカーがお兄ちゃんに攻撃したのって・・・

「・・・・・・・・」

「分かったよバーサーカー！　頑張って怪人役をやろう！」

「・・・・・・・・Σ（。□。；）」

・ ・ ・ ・ ・

side—白亜—

「最近現れた新しい力だ!」

【KAMEN RIDE!!】

【OOO!!】

「わぁっ!?

オーズだっ! よーし、やっちゃえ! バーサーカー!」

「■■■■■■——!!!!!!」

・・・何ですか、コレ?

何故か唐突に始まった、妖怪大戦争。

私、完全に置いてけぼりですね。

まあ、あんなのに銃やらなにやら効かなそうですし、いいんですけど。

「そおい!!」

【FORM RIDE!!】

【GATAKIRIBA!!】

おや、緑色に変わりましたね。

ていうかインパクト強すぎで思い出しましたよ。

あれ、転生前にたまに見ていた仮面ライダーですね。

あのオーロラも多分仮面ライダーで登場してたモノでしょう。

まあ、それはさておき、この超バトルを見るのはなかなか楽しいですが私は何時帰れるんでしょうか？

こういうのって決まって何かありますよね？

例えば・・・あの何の変哲もない場所とかに・・・

ビシュッ!! (スリングショット音)

「ぐわっ!!」

「ふおお!? ホントにいた!?」

「くっ・・・おのれ、ディケイドおおお!!」

シュウウウウン

あ、どこかへ行ってしまいましたね。

一体何だったのでしょうか？

おや？ また、あのオーロラが・・・

「今度は速っ・・・」

言葉を言い終わる前に白亜はオーロラに飲まれた。

・ ・ ・ ・ ・

side—蓮児—

俺とバーサーカーがバトルを繰り返している最中にまたオーロラが現れた。

「何っ!? いま良いところなのに!?!」

そんな声もむなく蓮児は元の世界へと強制送還されました。

・ ・ ・ ・ ・

sideー伊里夜ー

「行け行け！ バーサーカー！ ってあれ？」

また、あの変なのが出てきた！

ずんずん近づいて来てる・・・

よく見るとお兄ちゃんの方にも出てるみたい。

まだバーサーカーとディケイドの戦い見たかったんだけどなあ

ま、仕方ないよね！

そして、伊里夜達も元の世界へと帰った。

・ ・ ・ ・ ・

sideー白亜ー

「結局何だったんでしょか？」

やはり、あの変なおじさんが鍵みたいなモノだったんでしょか？」

なんとまあ、呆気なかったですね・・・

まあ、帰れましたしよしとしますか。

そもそも、私のいる意味は一体なんだったんでしょね。

・ ・ ・ ・ ・

side—伊里夜—

「あゝ、楽しかったねゝ
バーサーカー。」

でも、どうして、ディケイドがいたのかなあ？

変身してた人も違うよねえ？

・ 「んゝ、ま、いっか！」

・ ・ ・ ・

side—蓮児—

まあ、なんやかんやでバーサーカーと戦って帰ってきたが・・・

「結局何だったわけ？」

まあ、オーロラを通ったからあそこは別の世界だったんだろうが・

・

何故、バーサーカー？

あと、カッコいい弱音ハクもいたし・・・

本当になんだったんだ・・・

いや、まあ面白かったからいいけどさ

ハクさんとも話たらよかったかな・・・

・

・

・

・

・

side—皆さん—

「でも、まあ総合的に言えば」

「「結局何だったの（でしょう）？」」「」

—END—

第六話ー希里ありすー（前書き）

何か久々に更新だなあゝ

伊里夜のキャラ変わってないよね？

第六話ー希里ありすー

今にも死人に殺されそうになっている少女が巨人の目に映っていた。

この少女は数分前に父親と思われる男と一緒に助けを求め近くの家
にやって来ていた。

そのまま家の中に入ればバーサーカーは霊体化のまま何もせずにい
ただろう

しかし、少女の父親は家にいた人物に殺され、少女だけが残ってし
まった。

バーサーカーはその今にも死人に襲われそうになっている少女を救
うために実体化しそこへ向かった。

「ぷえ!?!」

「な、何だ!?!」

バーサーカーが突然現れて動きだす。

な、何でだろ?

何か見つけたのかなあ?

お兄ちゃん達は二階に駆け上がって行った

……わ、私も!

・
・
・
・
・
・

バーサーカーは斧剣を振るい少女へ近づく死人を叩き潰す。

「ひっ!」

あまりの迫力に少女は悲鳴を上げ、身を縮こませる。

「■■■■!?!?!」

バーサーカーは斧剣をなぎ払い一帯に群がっている死人共を斬り碎

く。

そして、バーサーカーは少女に近づき、手を差し伸べる。

「ふえ……?」

少女は少し恐れを含んだ瞳でバーサーカーを見る。

「……」

数秒立ち、少女は恐る恐る、バーサーカーの手に触れた。

・
・
・
・
・
・
・

「女の子を助けに行ってたのか……」

「バーサーカーはやっぱりスゴイ!」

「《奴ら》をああも簡単に……
恐れ入るな……」

孝が感心し、伊里夜が喜び、冴子が驚く。

「ヘラクレスってなら当然の行動ね

バーサーカーって言ってるけど理性もあるみたいだわ

でも、本当にあり得るのかしら、神話の人物が現代に現れるなんて……」

高城が何故か得意気な表情で言い、そして再びブツブツ考えだした。

「あ、女の子を掌に乗せてこっちに向かって来てる。」

平野がスコープを見ながら言う。

「それにしても、この辺にかなりの数の《奴ら》がいたのにほとんど全部死んでる………」

・
・
・
・
・
・

あれからバーサーカーが助けた女の子、希里ありすちゃんと色々お話をした。

「お父さんが死んじゃったんだ……」

「うん……」

「私もね、お父さんとお母さん、もう多分死んじゃってるよ

私を逃がすためにあのゾンビに立ち向かったから」

お父さんもお母さんも強かったけど
多分もう……

「寂しくない？」

「寂しいけど、今はバーサーカーがいるから平気！」

「巨人さん？」

「うん、バーサーカーっていうんだよ！」

格好いいよね〜！

強いし、頼りになるし。・

・
・
・
・
・
・

「僕達これからどうする？」

少女達二人が話している時、大人陣も話し合っていた。

「この辺の《奴ら》はもう殆どいないし、ここで一泊してもいいんじゃない？」

「そうだな、宮本君の言うとおりに一泊してもいいだろう」

鞠川校医もあんな状態だしな」

そう言い先生を見る。

「ううん、むにゃむにゃ……
えへへへ………ZZZ」

酔って超寝ていた。

ちなみに結構前から寝ている。

バーサーカーがありすを救った時は既に寝ていたりする。

「それじゃ、今日はここで休み明日の朝移動する事にしよう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7589n/>

学園黙示録に奴を放り込んでみた。

2010年11月23日21時52分発行